

世や直れ！

本 永 清（民俗エッセイスト）

琉球文学は世界文学である。そう語って、周りの友人・知人たちに自慢しているのだが、それには私なりの理由がある。

例えば、歌謡である。奄美から八重山まで、多様な歌謡のジャンルが存在すること、各ジャンルにはそれこそ無数の、個々の歌謡が含まれていること、この星のどこに一体、この琉球の地ほど歌謡文学の宝庫があるのかと考えて、そう主張したくなる。しかし、これは歌謡のジャンルや、各ジャンルに含まれる個々の歌謡の、数の多少の問題に限らない。内容的にも、例えばオモロやクェーナなどの神歌、宮古のニーリのような英雄叙事歌、琉歌はもちろん奄美の島唄・宮古のトーガニ・八重山の節歌などの叙情歌、等々、琉球という島嶼社会の中で、なぜ文学史を一望させるような多様な内容の歌謡が誕生したのか、これはじつに不思議である。

同様なことは、多かれ少なかれ、琉球の他の文学ジャンルにもいえよう。この人類の至宝とでもいうべき琉球文学を三十五巻の体系にして、世に出そうとする名桜大学創立二十五周年記念事業は、全巻が完結した暁には歴史的な快挙となろう。琉球文学に関心のある、世界中のおそらく少なくない方々が、それこそ祈りを込めて全巻の完結を待っているはずである。まさに「世や直れ！」（世は直れ！）である。

これまでに『おもろさうし・上』、『おもろさうし・下』、『組踊・上』、『琉歌・上』が刊行されており、各巻の執筆・編集に携わった方々には深く敬意を表すとともに、心から祝福を申し上げたい。

さて、波照間永吉、上原孝三、筆者の三名で、宮古の『神歌編』と『一般歌謡編』の執筆・編集を受け持つことになった。私は専ら『神歌編』の担当である。事務局から企画の説明を受けた

当初は、何とかなるだろうと安易に考えていたが、いざ執筆に着手してみると、いやこれは難業であることが分かった。宮古島で生まれ、宮古方言で育った私であるが、宮古各地の方言を逐語訳とはいえ、共通語に置き換えようとすると途中で思考が止まってしまって、前へ進めない。特に宮古方言の助詞は、大正時代に宮古を訪れて方言調査をしたロシアのニコライ・A・ネフスキーが「難しい」と語ったように、やはり難しい。宮古方言の助詞による現実の切り取り方が、共通語のそれとは若干違うだろうと考えるのだが、今テレビの俳句番組で話題の流行語「才能なし」の自分には、宮古方言の助詞の世界は曖昧模糊、その説明となると誰かに手助けを求めたい気分である。いずれ波照間、上原の両氏がその善意の手を差し伸べてくれるであろう、と密かに期待感を抱く。

「世や直れ！」。まず「世」であるが、これは世の中（社会）、時代という意味のほか、宮古の人たちの様々な願いを包括的に表す言葉である。佐良浜の歌謡オヨシ（お寄せ＝神託）では、当地の神々が住民に保障する「世」を示して、①村人全員に健康と長寿、②農民には田畑の豊作、③船人には航海安全、④島外へ旅する者には多くの富の入手、⑤漁民には豊漁を歌う。次に「直れ」である。これは様々な「世」を受けて、それら「世」の最も理想とする実現を願う言葉であろう。……歌謡で例示されるように、多様なジャンルと豊かな内容を持つ琉球文学が、世界の中で魅力ある文学の一つとして高く評価され、それが延いては今後さらに私たちの生活を励ますものとなるよう、これもまた「世や直れ！」である。

担当巻：第7・8巻『琉球歌謡－宮古篇』（上・下）

資料紹介

大宜味村謝名城の旅歌（故大城茂子氏の録音資料にふれて）

平良 徹也（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

大宜味村謝名城の神人大城茂子氏（故人）がかつて、「こういう歌もありますよ」と歌って下さったカセットテープ（1997年のウンガミの後、大城氏宅で録音）が手許で見付かったので、資料として紹介したい（訳や1・2・3解説は大城氏の発言を要約整理して掲載）。

1 子之端午之端や 風の元 でむぬ

（子之端午之端は風の元であるので）

あらし付きみそり 我船走らさんな

（嵐を出して私の船を走らせましょう）

1の解説 昔は帆船なので、風が大事で、今とは逆。今は嵐を出して下さいとは歌わない。今は静かな海にして下さいと歌う。逆なのよ。こういうのもあったということですよ。

2 行じく一ひーあんま 気張て来よなしぐわ

（行って来ます母さん 頑張れよ我が子よ）

あんまくまをうとてい お願さびら

（母は此処であなたの無事を祈りましょう）

3 儲けてい来る 迄や かいまぐわぬお酒

（儲かって帰る迄は走馬の盃で少しのお酒）

儲けていもうちからや 茶碗お酒

（儲かって帰ったら茶碗でたっぷりのお酒）

2・3の解説 「いんじく一ひーあんま」は娘が言うんですね。「儲けておいでよ。そして、儲けてくる間はいまぐわ（盃）のお酒で、そして儲けて来てからは大きな茶碗のお酒で祝いましょう」というものです。行ってから、現在の4「ダンジュ嘉例吉や・・・」、5「綱取ゆる御船の・・・」、6「嘉例吉の御船に・・・」、7「大和から沖縄・・・」と続いています（注 4・5・6・7は多くの地域で歌われているものと同一、記載省略）。

以上の旅歌7首が録音されていた内容である。

旅歌は出船や航海に対する儀礼的な歌謡と家族との別離の歌謡などが盛り込まれるもので、1は帆船の時代の航海が風頼みであったことをよく表し、久米島の「黒石森城 風のもとていむぬ 明日になる御風 今日にたぼり（訳 黒石森城は風の元という。明日吹かず風を今日にして下さい）」とも同様のものである。北風や南風などの順風となる季節風の吹き出しを風の蔵元に希い、速く帆走することを願っている。

次の2・3からは、謝名城での旅歌の歴史の一コマが見えてくる。近代以前、旅歌は王府の中国進貢や江戸立ち、薩摩上国、宮古八重山などへの旅に際して、王府の公的儀礼や士族層の家礼などで、旅衆の無事を願って行われていた。そして明治の中期以降からは、出稼ぎや出征、移民など船送りの儀礼として、名護の白い煙・黒い煙のような逸話を生み出して、沖縄の村々に広まっていた。沖縄本島の西海岸一帯に点在する船送り毛の小地名が、そのことを良く物語っている。謝名城における近代のこの旅歌も他と同様に母娘の別離が、貧しさゆえに、娘が紡績に行くこと、紡績に行くことが娘の孝であること、紡績に行くことによって儲けてくることなどの情景を浮かび上がらせる。はたして母娘の願い通りであったのかどうなのかは「女工哀史」が語っているところであるが、この様に旅歌は時代の風景を切り出し、語るともなく歴史を物語る。これらを掘り出すことこそが沖縄の歌謡研究の醍醐味なのかもしれない。

担当巻：第4巻『琉球歌謡—沖縄篇』（下）
第11・12・13巻『琉歌』（上・中・下）

2023 年度 上半期業務報告

(4 月～9 月)

2022 年度総括及び「編集ガイドライン」の策定(4 月)

年度内 3 冊(『組踊 上』『琉歌 上』『おもろさうし 下』)の刊行を果たした 2022 年度を振り返り、第 1 回事務局内会議から全 35 巻刊行に向けた持続可能体制となるような指針内容を盛りこんだ「編集ガイドライン」について協議が行われ、①編集事務局、②協働作業、③健康管理、④組織体制のあり方について一定の方向性が確認されました。併せて、年度内 4 冊刊行に向けた年間スケジュールを前年度の課題を踏まえた総括で振り返りを行い、4 月中に継続して集中審議がなされました。

「琉球文学大系」全 35 巻再構成案の検討(4 月～7 月)

ゆまに書房内容見本(パンフレット)に示された全 35 巻構成のうち『琉球演劇』全 5 巻が諸般の理由により上下 2 巻に変更となりました。組み換えの発生した 3 巻については『琉球説話』を 2 巻増やし、『琉球歌謡—奄美篇』を 1 巻増やす方向で協議が継続して行われました。奄美篇については 3 月下旬と 5 月下旬に奄美出張が行われ、7 月 10 日(月)には東京ゆまに書房において標記について説明が行われ、関係各位(ゆまに書房、名桜大学)による協議を経て再構成の提案について合意確認が行われました。併せて、本年度刊行順の変更(『球陽 上』を『民俗 4』と入れ替え)についても、変更理由の説明が行われ、了解を得るための手続き等確認が行われました。



ゆまに書房との調整会議の様子(7/10)、於ゆまに書房本社

新宿紀伊國屋書店で「琉球文学大系」刊行記念講演会開催(7 月 9 日)

出版の元請けとなるゆまに書房からの依頼に基づき、新宿紀伊國屋書店 3 階アカデミックラウンジにおいて“「琉球文学大系」のこころみ”と題して波照間永吉編集刊行委員長による記念講演会が 2 時間(14:00～16:00)にわたり行われました。同日夕方には東京駅八重洲口にほど近いレストランにおいて、ゆまに書房と本学刊行事務局による

懇談会が開催されました。同懇談会開催については産学連携長期プロジェクト事業の持続可能性を担保するため、負担の少ない年 1 回開催(輪番制)とし、次年度は名桜大学での沖縄開催が予定されています。



刊行記念講演会の様子(7/9)、於新宿紀伊國屋書店 3 階

刊行記念トークイベントの開催続く(7 月～8 月)

ジュンク堂那覇店(森本店长)のご協力を得て、昨年度に刊行された『組踊 上』の刊行記念トークイベント(鈴木耕太委員、波照間永吉委員長)が 7/30(日)に開催され、翌 8 月には『琉歌 上』の刊行記念トークイベント(平良徹也委員、照屋理副委員長、波照間永吉委員長)が 8/19(土)に開催されました。この模様については動画にまとめて、本学 HP においても配信を行っています。また、新宿紀伊國屋書店での刊行記念講演会 7/9(日)の模様および昨年 8 月開催の『おもろさうし 上』トークイベントについても動画で視聴が可能です。

三次にわたる『球陽 上』編集合宿(8 月～9 月)

8/25(金)に小林基裕編集アドバイザーが来沖し本格的に『球陽 上』編集合宿のスイッチが入り、那覇市内コンドミニアムでの第一次合宿(8/30～9/6)を経て、西原町池田公民館での第二次合宿(9/7～9/10)でのゲラ校正作業が集中的に行われました。その後、第三次の最終工程(9/11～9/15)は南風原町の沖縄高速印刷 2 階において、校注者、事務局、協力委員の 10 名余が詰めて出張校正作業を行い、製作部との協働作業により 9 月 15 日 24 時に無事校了となりました。



『球陽 上』第三次編集合宿の様子(9/11)、於沖縄高速印刷 2 階
右前方より麻生、山田、田名、漢那各校注者、宮城
左前方より前里、小林、平良(徹)、波照間、比嘉(緋)、撮影:渡具知

一期一会

前里 貴史（大系サテライト事務局）

私が『おもろさうし』という存在を知ったのは高校二年生の時だった。父親から「大学ではオモロを勉強したらどうだ」と言われ、久米島のオモロが書かれた本を見せられたのが初めてである。初めて見るオモロは、ひらがなで書かれてはいるが、言葉の意味が全く分からなかった。卒業後の進路に悩んでいた私ではあるが、「これは無理！」とすぐさま進路の選択肢から外した。当時の私は佐藤優氏が久米島高校に寄贈した経済誌を読むのが好きで、毎日のように図書館に通ってはそれを読んでいた。その影響もあり、進学した琉球大学では政治学を専攻した。

大学卒業後、二年間は塾講師をしていたが、転職を決意し、しまくとぅば普及センターで勤務することとなった。そこで当時センター長をされていた波照間永吉先生と出会った。先生が『おもろさうし』の研究者であることを知ったのは、面接の後だった。

2020年の2月15日、名桜大学主催の「琉球諸語と文化の未来」というシンポジウムが開催されることを聞き、波照間先生と佐藤優氏が登壇するとあって、すぐに行くことを決めた。波照間先生はそこで「琉球文学大系」についても話されていた。その当時私は「また先生は大変なことを始めるんだな〜」くらいにしか思っていなかった。

三年勤めていたセンターを退職することを決め、次の職を探していた矢先、思いがけず波照間先生から「琉球文学大系」編集刊行事務局を紹介していただいた。他人事のように考えていた大事業が一気に私の眼前に出てきた。いただいたパンフレットを見ると、第一巻と二巻は『おもろさうし』であった。これも何かの巡りあわせに違いないとすぐ受けさせていただき、今では琉大サテライト事務局編集現場の当事者となっている。編集者として「琉球文学大系」にかかわっていく中で、琉球文学の面白さに触れている私は、今年度から名桜大学大学院に入学し、琉球文学を専攻する二刀流の身となっている。高校二年生の時に匙を投げたはずのオモロに向き合っていると、少し遠回りした感はあるが、何か縁のようなものを感じずにはいられない。

「琉球文学大系」新規関係委員の紹介

本事業の関係委員に、このほど宮川耕次氏（宮古郷土史研究会）、大嶺可代氏（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所・共同研究員）、玉那覇峻氏（沖縄県立開邦高等学校・教諭）が新たに加わりました。

宮川氏は第22・23巻『琉球説話』（3・4）、大嶺氏は第17・18巻『琉球演劇』（上・下）、玉那覇氏は第24巻『琉球和文学 上』を担当します。

「琉球文学大系」関連記事目録—2023年4月～2023年9月

- ・新垣俊道（沖縄県立芸術大学准教授）「＜書評＞『琉球文学大系 11 琉歌（上）』 音楽、文学の土台深める」（琉球新報、2023年4月16日、日刊／社会 p22）
- ・波照間永吉（「琉球文学大系」編集刊行委員会委員長）「沖縄人の心性 未来へ繋ぐ」（東京新聞、2023年6月21日、夕刊／p5）
- ・知念清張（沖縄タイムス学芸部）「おもろさうし下巻 発刊 名桜大「琉球文学大系」」（沖縄タイムス、2023年6月30日、日刊／文化 p14）
- ・狩俣恵一（沖縄国際大学名誉教授）「＜書評＞『琉球文学大系 2 おもろさうし 下』 鑑賞するための多様な視点」（琉球新報、2023年8月13日、日刊／社会 p23）

事務局だより

本事業に対しこれまで継続して応援くださっている伊差川則子氏より、『球陽 上』編集合宿（8/25～9/15）への茶菓子やコーヒーなど多くのお心尽しの品が3度にわたって各編集合宿先（那覇市内コンドミニアム、西原町池田公民館、沖縄高速印刷）に届けられました。記して、心より厚くお礼申し上げます。